

坂折山の

玉んびようだぬき②

下末松 上村しづ



《前回の粗筋》
昔、坂折山に玉んびようとい
うたぬきが妻めくと住んでいた。
たまんびようはたぬき仲間の
統領として仲間とともに仲よく

暮らしていたが、日ごろから家
来になれと迫っていた浦戸のひ
たい白たぬきが大名行列比べで
結着をつけようと申し込んでき
た。これを受けたたまんびよう
は、仲間話を伝えた後、黙つ
て山を出た……

玉んびようが発してから十
日ぐらいたったころ、見知らぬ
たぬきが玉んびようを訪ねて来
た。めぐは坂折山の洞穴には入
れず祈年様の縁の下へ招き入れ
て用件を尋ねた。

「私は琴平山の黒なみとい
います。琴平様の夏祭りを知り合
いになった者です。玉んびよう
様にお目にかかりたくて伺いま
した。」

「まあそれはそれは、せっか
くはるばるおいでくださったの

『ほのぼのの広場』に、あな
たの身の回りのほのぼのとし
た話題や我が家の自慢料理、
読書の感想など、お気軽にご
投稿ください。

▼投稿先 〒783 南国市
大埔甲二三〇一 南国市役所
内 広報委員会まで。

に悪い風邪を引き寝込んでおり
ます。」

「へえー、ご病気とは。ひた
い白との行列比べはもう仲間じ
ゆうで持ちきりです。」

「そんなに評判でございます
か。病気でなくても浦戸の親分
様にはかないません。自分にな
ろうか。わざわざ負ける行列比
べをするよりあつさりかわいが
つてもらう方がましとも言つて
います。」

「えらい弱気になりましたこ
と。琴平山の者は皆こちらの心
援をしようと語っているのに。
困ったことになりました。」
と、肩を落としてすこすこと帰
って行った。

いよいよ十月になったある日
の夕方、一羽のはやぶさが祈年
山上で輪をかき、坂折山のくす
のきの枝に羽を休めた。大敵を
見つけた若者たぬきはそれぞれ
子だぬきたちを巣穴に逃げ込ま
せ、自分たちも家に逃げ込んだ。
めぐは、はやぶさを迎ぎ祈年様
に手を合わせ、無事に戻った夫
のお礼を言つて丁寧に拝んだ。
次の朝早く、坂折山と祈年山
の間の草原に全員のためぎが集
められ、玉んびようが姿を現し
た。なるほど毛のつやも悪く目

もくぼみ血走っている。病気と
思っていた仲間は玉んびようを
気遣った。玉んびようははやぶ
さになって東海道に行き、参勤
交代の大名行列を調べに行つて
きたのであった。ひたい白は高
知で山内様の行列を見慣れてい
るので完べきな行列を作るだろ
う。それなら山内様より偉い殿
様の行列を見てしっかり覚えて
こようと考えたのだ。皆に相談
したりすると、どこからひたい
白に漏れるかわからないので皆
をだましたのであった。

大名行列のけいこが始まった。
ひたい白の仲間は多いので行列
はりっぱになるだろう。こちら
は子だぬきを入れて三十四。お
供の人数でも負けである。

玉んびようは自分の胸毛
を抜いて家来の者に化け
させるつもりをしている。
間違えば命取りになりか
ねない大切な場所の毛で
ある。

玉んびようはこの年越全
体の仲間を守るのに命を
懸けようとしていたので
あった。
年越山全部の高い木の
上には見張りを立てた。
この前玉んびようを訪ね

てきた琴平山の黒なみはひたい
白の回し者であることをめぐが
見抜いていたからである。玉ん
びようは琴平様へお参りに行っ
たことはない。祈年様のそばで
暮らし、優しい神官さんにかわ
いがつてもらっているのですよ
の神社へ行くことは絶対になか
った。琴平様の夏祭りで友達
になった」という黒なみの話で
めぐはうそを見抜いていたので
あった。若者たぬきは行列のけ
いこのために琴平山のためきた
ちになぜ心援を頼まないかと不
思議がしたが、やっと訳がわか
り、これはうかうかできないぞ
と必死で難しい練習を続けた。

（つづく）

